

「アート」の視点から

人間、この聖なるもの

本江 邦夫

「人間にとって芸術とは何なのだろうか？」これは私どものように芸術ならびに芸術家の周辺にいる者たちにとって、片時も忘れてはならない不可欠の問いです。そして、私の考えでは、これは次のような不思議な問いと同じことを意味しているのです。つまり、「人間にとって人間とは何なのだろうか？」ここで注意していただきたいのは、これが「人間とは何か？」といった、ただ対象を冷徹に分析するだけの、我関せずの突き放した問いではないということです。あるいはこう言ってもよいかもしれません。人間にとって人間とは何なのか？ これを考え、実践するのが芸術だと。

ある者が人間であるとは、同時に「人間」とともにあるということです。私がここで「他人」と言わないのは、そんな言い方をするとそこにすでに人間による人間の切捨てが始まるからです。人間であるとは、共に人間であることです。そして、共に人間であるとは、人と人とが、その存在の奥深いところで通じ合っているということです。そこには区別も差別もないし、蔑視も無視もありません。

人の奥底にあるもの。これにはさまざまな呼び名があるでしょう。芸術表現とのかかわりから、私はこれをフロイト的な意味でとりあえず「無意識の世界」と呼ぶことにします。ユングの集合的無意識という言葉を使ってもたいして違いはありません。要は、人というのは実は無意識の海に、そこだけぽっかりと頭を出した氷山のようなものだということです。だから、まるで氷山の一角のような「意識の世界」だけで物事を見ていたら、人間はさまざまな調査、研究による無数のデータを排出しながらいつまでも謎のまま終わるのです。

無意識を通じて人を見るというのは言うまでもなく、フロイト、ユングを中心に20世紀初頭に一般化してくる考え方です。これは芸術の世界をも押し広げ、深めることになりました。このときフロイトの精神分析を援用したシュルレアリスムの無意識的なものを引き出す手法、オートマティスム(自動筆記法)が果たした役割についてはよく知られています。しかし、それ以上に重要なのは、幼児のそれも含めた、まだ知性が十分に発達していないか、あるいはもっと無意識界に近い人びとの、心からの喜び、悲しみ、苦しみを帯びた、まるで魂の無垢の叫びのような線描作品の存在でした。クレールは子どもの落書きにヒントをえて、一筆描きのような一連の「天使」を生み出し、子どものころからいきなり大人の絵を描いたピカソにはつねに児童画の自在さへの憧れがありました。

こうした、既成の制度化されたものとは別のタイプの芸術に、すべての思惑を超えた人間存在のより原初的な発露を直観し、それを「生(き)の芸術」(Art Brut)と名づけつつ、収集し、またみずからそれを実践したのがフランスの画家デュビュッフェ(1901 - 85)でした。これはつまり、こと芸術、つまりもっとも人間的な領域にかんするかぎり、人は人と共にありえ、そこに無用な区別や差別を持ち込む必要はないということです。この意味ですべての人間は、人間を超えたもの、つまり「聖なるもの」とでも呼ぶしかないような世界とつながっているのです。

こう考えてくると、障害者という日本語の表現は、実に不穏当で醜い言葉ではないでしょうか。人が人と共にある芸術の国では障害も差別もありようがないのです。英語には handicapped という言い方があり英和辞典には「肉体的もしくは精神的に障害のある」とありますが、もともとは「不利な条件にある」といった程度の意味です(競技やゲームで「ハンディをつける」というではありませんか)。これはフランス語も基本的に同じです。ドイツ語には日本語に近い der Versehrte という表現がありますが、これにしても「傷つけられた者」というのが原義です。たんなる人間としてのタイプの違いを「障害」という、よくよく考えてみると意味不明の言葉にすりかえるべきではないと、私は思います。「不利な条件にある人たち」だから「共にある」人として手助けしなければならないという自然な理屈がこの言葉の回りでは生じにくいのではないのでしょうか。「聖なるもの」にもっとも近づいている人びとにふさわしい、もっとも人間的な、あたたかな表現があるはずで、それを皆で考えねばなりません。